

## 『加賀見山旧錦絵』

天明二年（一七八二）に江戸の薩摩座で初演された「加賀見山旧錦絵」（初演は「加々見山旧錦絵」）は、大名家の奥御殿での敵討ち事件と、加賀前田藩のお家騒動をからませた全九段。六段目が「草履打」、七段目が「廊下」「長局」から「奥庭」にあたる。

実説は、京都在住の本島知辰（もとじまともたつ）が元禄から享保にかけての見聞を書き留めた『月堂見聞集』に詳しく記されている。享保八年（一七二三）三月二十七日に、石見国浜田五万石の城主、松平周防守の江戸上屋敷で事件が起きる。局沢野（三十八歳）に「毎度不調法不屈者」と強く叱責された中老滝野（二十三歳）は、自室に下がって下女の山路（十四歳）に、母への手紙を託す。様子を不審に思った山路が、門外で手紙を見てみると遺書なのであわてて駆け戻ると、すでに滝野は自害。山路は沢野のもとへ行き、主人の敵を討ったという。「草履打」という趣向以外、おおよそのあらすじはこの時点で出揃っているといっている。

「草履打の段」からは奥女中の世界。局岩藤と中老尾上、召使お初という、三人三様に描き分けられた女性像に迫る場面が続く。

こちらでも、お初は尾上の召使ですから奥女中というわけではなく、又者（家臣の家臣）です。尾上は町人の家の生まれで、町人の娘が屋敷奉公をするという、十八世紀になってからの傾向を作品に取り入れたものとされる（御殿女中についてご興味をお持ちの向きは、当事者からの聞き書きを元にした『三田村鳶魚全集』所収の考察を参照）。定められた年季（おおよそ十年、それに御礼奉公一年を加算）での、いわば嫁入り準備、もしくは腰掛けですが、利発な尾上はたちまち主のお覚えめでたく、岩藤には面白くない。こうした人間関係は、当事者である御殿女中たちに最も痛切で、彼女たちの宿下がり時期である三月を当て込んで、歌舞伎では「加賀見山物」は弥生狂言の定番だった。文楽では、上演年表をざっと見てもお分りの通り、必ずしも三月に限定されているわけではない。

局岩藤は伯父弾正と足利家横領を企んでいるが、岩藤が落とした弾正の密書を尾上が拾う（「旧錦絵」三段目）。それに気づいた岩藤が、尾上に喧嘩を仕掛ける「草履打の段」。明治初年から掛合の形式で演じられている。尾上が堪え続ける姿に手を焼いた岩藤は、草履で打って手向かいさせようとする。角隠しが外れて、片はずしの鬢からシケ（ほつれ髪）が垂れても、尾上はひたすら辛抱。しかし、寺々の暮れの鐘を聞きながら一人退出する時には、すでに自害の覚悟。お初がこの事件を朋輩から初めて聞き、そして弾正と岩藤の奸計をも立ち聞きしてしまうのが「廊下の段」。

続く眼目の「長局の段」。奥女中たちそれぞれの居室が連なっている長局。誰もが昨日の事件を意識しているという息の詰まりそうな局面の中で、その当事者と、それを最も気遣う召使との、たった二人きりを描く浄瑠璃で、四代目竹本越路大夫は「脂汗が滲み出る」と述べている。しかも、こ

の約七十分の一段の中に、緊迫する地合あり、対話劇あり、述懐も、クドキもあり、激情ほとぼしる件もあり、義太夫節という語り物の間口の広さを、すべて試すような局面と技法に満ちた難曲といえる。

弾正と岩藤の企みを聞いたお初の「テモ恐ろしい巧み事」という、冒頭の一句が難しいと演者たちの芸談が口を揃えるところ。演者の側からは「テモ」を言うために引く息が肝腎とのこと、観客は、瞬時も息を抜けない局面が始まる緊迫感を受け止めればよろしい。戻ってきた尾上の前に、履き替えの草履は滑らせて置くのが故実。草履を見るとハッとする尾上。その後も、書見台やキセル、脇息など、小道具が巧みに使われる。

尾上を氣遣うお初と、そのことを十分にわかっている尾上。お初は、実家の借金十両を尾上の父が立て替えた縁（「旧錦絵」二段目）で、今春からの新参者なので、長年知り尽くした間柄ではないが、共通の趣味は浄瑠璃。「忠臣蔵の浄瑠璃」を例に出しての対話を、後に尾上はお初の「健気な利発」と感謝する一方、お初はいつまでも事情を打ち明けてくれない尾上を、「ふがないお生まれ」と「はがゆく」思っている。町人の娘の尾上と、年少でも武家の娘のお初という対照が、背景にある。その肚を呑み込んで、実に四分近く三味線に一撥も触らない、詞だけの純会話劇が続き、そのすぐ後の「奥様はじめ、ご家中散り散り」では、お初の気持ちに添う撥音が求められる。

お初が神棚にお灯明を上げたり、薬を煎じる（団扇の柄が折れる不吉の前兆あり）間に、尾上は母への書置をしたためる。筆の先から墨がすすると流れ出るような三味線の美しい手が印象的で、「江戸冷泉」という優美な節も「思い詰めたる憂き涙」で引き締めて語られる。文の使いに出るのを嫌がるお初を、主<sup>しゅう</sup>の威光で無理に押さえつける尾上。尾上を案じるお初の独り言の間にも、繊細なアシライの手がついている。文章に描写はないが、その様子を尾上がうかがうのも哀切。塵を摘まんで手水に見立てる「塵手水」を使い、尾上の無事を神棚に祈ってお初は出立、裾をからげるので女方人形ですが足がある。

一人になって初めて尾上は涙を流す。娘に返っての親を思う嘆きから、持薬の黒丸子<sup>こくがんし</sup>を送り、あと三年少しで奉公の年季明け、と楽しみにしている母親の姿が浮かび上がる。

場面は一転、門外のお初。耳にする不吉な辻占（往来の人の言動で吉兆を占うこと）に、思い切って文箱を開けると、書置と因縁の草履。そこからは一気に思いのたけを吐き出し、新参の少女は主の敵を討つ烈女となってゆく。草履の裏で寝刃を合わせ、軒から吊された藤を切り下げて、仇討ちの覚悟を固めることに。

「奥庭の段」でさらに示される岩藤の強悪。雨の音、赤貝を擦り合わせて出す蛙の声による雰囲気醸成。はじめ下手に出ていたお初は、岩藤と

傘をかせにした大立ち回りの末にこれを仕留め、中老として二代の尾上の名を継ぐことになって大団円を迎える。

(見玉竜一)